

人文学会報

No.78号
2017. 3. 17

事務局 鹿児島市下伊敷二丁目52番1号 県立短期大学文学科研究室
鹿児島県立短期大学 人文学会

電話(〇九九)二三〇一―二二一

〈研究室だより〉

友情について

―卒業生へのメッセージ―

フィリップ・アダメック

二〇一六年六月、高校の同級生でバンド仲間だった親友が重い病を患い亡くなった。彼は強靱な精神で演奏し、歌い、そして歌詞を書いた。彼とは十五年近く実際に会って話をしたことがなかった。で、彼の死がもたらした影響の大きさに愕然とした。私の頭の中は彼の訃報がもたらした喪失感で一杯になり、近々の発行に向けて準備をしていた凡庸な学術論文はそっちのけになった。私は最初の計画を打ち捨て、かわりに彼について書くことにした。

私が書いたものは、ある意味でジーク

ムント・フロイトが「喪の作業」と名付けたものの実例だと言える。喪の作業は、亡くなった人について何かを書いたり称える言葉を述べたりしてその人を直接追想するということもあるだろうし、あるいは個人的な計画の遂行、たとえば故人との関係を感じ取れない芸術作品の創作――絵画制作といった特殊技能による営為――というかたちで表されることもあるだろう。いずれの場合においても、喪われた人は悼むひとによってさまざまな形で追慕され、作品を惜別の品として告別を為し終える。

別の視点から見ると、私の書いたものは単にオマージュとか賛辞とかいうだけではなく、友情のひとつのかたちを反映したもの、具体的に言えば、創造的プロジェクトを成し遂げるため時間も手間も惜しまず共同作業を行うなかで生じ

た友情を反映したものだ。共同作業を行うなかで形作られ強固なものとなった友情は、通常の友情を維持する上で必要とされる条件――同年代であること、氣質が似通っていること、政治に対する姿勢が同じであったり、エンターテインメントや芸術に対する嗜好が同じであること――が無くてもうまくいく。こうした条件がすべて不要になるだけではなく、創造的目的を互いに完遂させることを通して友情は強まる。

恐らく私の同僚は大学刊行物の編集者としての立場で私の作品を読んだときにこの二つの観点について理解したはずだ。そしてそれが故に下記のような依頼を書き送ってきたのだろう。「急で申し訳ないのですが、卒業式に配布する『会報』の巻頭言に『人文』四〇号に掲載された「Gregorio, in Memory」の簡単な紹介を

〔卒業〕とか「別れ」とかに関連して書いていただけませんか。』

同僚がいう二つの事柄の結びつきについて私は即座に理解した。鹿児島県立短期大学で授業を担当する学生たちが卒業を迎えるにあたり、多くの学生にとってこの季節が淡い喪の感情を体験する季節となるであろうということが、私の胸を打つ。二年にわたって築き上げてきた関係が散り広がるときを目前に控え、学生たちは、級友や教師たちとの友情の価値を再び認識しなければならないと感じている。この作業は意識的に行うことが大切だ。卒業式で「G線上のアリア」がかかっている間だけではなく、その後の数ヶ月間それぞれの生活の中で、卒業生たちが、鹿児島県立短期大学で出会ったすべての人々について良い事を思い出す時間を持ち、物事の良い面を胸に刻んで瑞々しい生活の新たな一章へと踏み出されんことを願います。

（文学科英語英文学専攻 教授）

※「Gregorio, in Memory」は、鹿児島県立

短期大学『人文学会論集』第四〇号に掲載。

<http://id.nii.ac.jp/1430/00002769/>

〈卒業にあたって〉

最後の学生生活

文学科日本語日本文学専攻

芦谷 仁美

卒業を前に、私自身の二年間の県短生活振り返ってみようと思います。

私の県短での生活は、とても充実したものでした。着慣れないスーツを着て出席した入学式から始まり、バレーボールにバドミントンと楽しみながら体を動かした体育祭にも参加しました。何回もの研修に参加した遠泳大会のボランティア活動は、本番の日は、残念ながら台風の

影響で中止になってしまいましたが、友人の輪が広がるいい機会になりました。秋の文化祭は専攻ごとに出し物をするこゝとで団結力のようなものが強まった気がします。また、学内開放では、模擬店を出しました。完売した時の達成感は今でも覚えています。このような様々な学校行事を通して、同じ専攻の友人とはもちろん、他の専攻の友人や学校の先生方、大学生協の職員の方々など様々な方々と関わる事ができました。また、県短に入って初めての経験もしました。それは、コープ委員会の副委員長をしたことです。私は、人前に立つことが苦手で、誰かの前に立つてまとめるような役割は今までの生活では、経験したことがありませんでした。しかし、一年生の後半から始める就職活動のことも考えて、この短所をどうにか克服しようと自ら副委員長に志願しました。最初は本当に慣れなくて苦労することも多かったのですが、委員長や他の委員会のメンバーと協力しながら一つずつ行事をこなしていきました。す

ると完璧とまではいきませんが、人前に立つことをあまり苦に感じるものがなくなっていました。だから、本当にいい経験をさせてもらったなと感謝しています。また、この経験は社会人として仕事をしていく中で何かしらの役に立つと思うので本当に携わることができて良かったなと思いました。

このような楽しい思い出がある反面、苦しい経験もしました。それは就職活動です。私は公務員になりたくて、一年生の十一月から昼間は県短に、夜間は公務員学校へ通いました。公務員試験は一般企業の面接の時期より遅い時期にあるので、周りの友人はどんどん採用を勝ち取っていて、私はとても焦りを感じていました。ですが、その焦りを取り除いてくれたのが、学生課の先生方でした。先生方や事務の職員の方々との距離が近く、アットホームな感じの学校というのが特徴の県短ならではのですね。面接練習には、顔を覚えてもらおうくらい通い、ちょっとした相談事にも親身になって応じてく

れました。その甲斐もあって就職が決まったことを報告しにいくと、自分のことのように喜んでくださったことは、これから先、いつまでも忘れることはないと思います。またこの就職活動がうまくいったのは、家族の存在も大きかったと思います。夜遅くに公務員学校から帰ってきても、必ず温かくておいしいご飯を用意して待っていてくれたり、模試の結果が思うように伸びなくて八つ当たりしてしまっても励まし、元気づけてくれたりしました。だからその分、初任給でなにか恩返しができたらいいなと思います。

今年の四月から私は社会人になります。そして初めてのひとり暮らしも始まりです。学生と社会人とは、違う部分がたくさん出てきて様々な壁にぶつかると思っています。しかし、そんなとき、県短生活で培った経験を生かして一つ一つこなして頑張っていこうと思います。そんな生活の中でも、周りにいる方々への感謝の気持ちを忘れないようにして、立派な一人前の社会人になりたいと思います。



あつという間の二年間

文学科日本語日本文学専攻

中屋 あおい

この二年間は、本当にあつという間でした。また卒業が間近に迫ると、毎日学校に通って、友人と一緒に授業を受けたり、お弁当を食べた何気ない日々が、愛おしくも感じています。

私の短大生活は、楽しみという気持ちとともに、もともと志望していた大学に

落ちたことから立ち直ろうという気持ちで一杯いっぱいでした。本当に学校生活を楽しむことができるか不安もありました。しかし、三十名しかいない日文のみなど出会ったことで、学生生活が楽しめるようになりました。また私は二年間の間で、通常の授業だけでなく教職の授業も取ることを視野に入れていたため、授業数が多く慌ただしく毎日が過ぎ、そのことが逆に私を学校に慣れさせてくれました。

授業は想像していたとおり、文学と日本語にまみれていました。文学は一般的に元々興味があったので、とても興味深い授業ばかりでした。言語学は、初めて触れることばかりで毎授業が新鮮でした。県短生になったことで、視野も大きく広がりました。一年生の前期、南京からの中国人留学生と出会ったことで、海外に対する興味を引き立てられました。仲良くなった留学生の子に鹿児島文化を伝えるだけでなく、たくさん会話をするなかで、中国の文化、大学生活の様子、社

会の様子を知りました。このことがきっかけで、この年の十二月に、私は鹿児島県の海外派遣事業に参加して、台北を訪れることができました。人生初の海外は、何もかもが新鮮でした。企業で働く二十代・三十代の方々をメインに募集して研修を行うというものだったので、県内の企業の方々と触れ合うこともできましたし、現地の企業を訪問したり、現地で働く台北の方とたくさんお話をすることができ、普通の旅行では経験することのできないことをたくさん経験することができました。また、台湾の歴史的背景による独自の文化を知ることでもできました。十代で全く知らない方々と海外に行くという経験ができたのは、私にとってとても大きかったなと思います。

私の県短生活で一番大きかったのが、自治会役員として活動したことです。あまり活動的なサークルには入っていませんでしたが、思いがけず本部会計という

大役をいただき、すべての行事をこなしていくのは、本当に大変でした。学生の皆さんから頂いた自治会費を、うまく行事として還元していくのは、想像以上にハードな日々で、大変で嫌になることも多々あったように思います。そんなときに支えてくれたり言葉をかけてくれたりしたのが、一緒に頑張っていた役員の間でした。同じように頑張る仲間たちがたくさん励ましてくれました。役員全員が同じ想いを持っていたからこそ、支えあいながら頑張ってきたのだなと思います。自治会役員みんな本当にありがとうございます。

二年生になって、卒業論文に取り掛かると同時に、私には編入試験の対策を始めました。編入学は、県短に入学した時から決めていたので、いろいろと調べたり、試験の対策を練ったりしました。第一志望の大学に合格できた時は、本当にうれしくて、県短での友人にすぐに連絡してしまいました。たくさん友人にお祝いしてもらえて、頑張ってよかったな

と感じました。

教育実習も、とても思い出深いものです。私の母校は、鹿児島大学教育学部の代用付属校に指定されていたため、約六十人の鹿児島の学生の皆さんと実習をしました。実際の現場に出てみて、授業だけでは知ることができない沢山のことを知ることができました。実習を通して教員という仕事の大変さも魅力も知ることができてよかったです。

こうして二年間を振り返ると、とても濃い二年間だったのだなと思います。みんなに楽しい毎日を送れたのも、日文のみんなに出会えたこと、先生方に出会えたことのおかげだと思います。これからそれぞれがばらばらの地で生活しますが、この県短での二年間を胸に、より精進していきたいなと思います。日文最高！



貴重な短大生活、

そして人生選択

文学科英語英文学専攻

今村 玲 菜

四月からの就職を控え、期待と不安を胸に見つめる先には一体何が待っているのでしょうか。振り返ってみれば今から約二年前、私はこの鹿児島県立短期大学に、ご縁があつて入学することができました。英文専攻を選んだ理由は、高校時代に唯一成績が良かった教科が英語だった、という非常に淡白なものにすぎません。ですが私は胸を張つてこの大学に入つてよかつたと思えるのです。というのも、素晴らしい友人たち、そしてかけがえのない恩師の方々に出会えたからです。

同じように英語が好きでこの専攻を選んだ仲間たちとは多くの思い出があります。英語を活かせる職に就きたいという確固たる目標を持った友人や、一人で留学に挑戦する友人は何よりの刺激で、いつも私自身を見直すきっかけを与えてくれました。また理想の夢を語り合つたり、バカ騒ぎをしたたくさん笑つたり、時には互いに切磋琢磨して勉学に励んだり、本当に楽しくて貴重な時間を共有することができました。

一年時の語学研修では、専攻や学年を超えて多くの仲間と深い関係を築くことができました。英文専攻とはいえ、未熟な英語力で外国の方と話するのはとても勇気のいることで、初めは戸惑いもしました。しかし周りの友達や先生方に励まされ、積極的に行動することで貴重な経験をすることができました。恥ずかしがらずに積極的に取り組むことの大切さを教え、私を成長させてくださった石井先生には、今でも感謝しています。

二年になるとゼミがスタートし、いよ

いよ大学生だなという実感がわいたことを覚えています。私のゼミは教授が外国人だったためにいろんな苦勞がありました。伝えたい事を教授にうまく伝えられなかったり、書きたいことが英語で書けなかったりと、毎日が葛藤との闘いでした。しかしそれは私だけでなく、ゼミの仲間も同じように各々で悩み闘っていました。だからこそ励まし合える仲間が私にとってはとても大きな存在だったので。仲間たちのおかげでいろんな苦勞を乗り越えてこられたのだと思います。

また一番辛く、そしてまた一番嬉しい思いをしたのは就職活動です。私は一年の終わり頃から公務員になることを志望していました。自分なりに勉強してきたつもりでしたが、実際うまくはいかず、民間企業への就職の道を選びました。面接は中学受験以来でしたし、就活という言葉をきくのもとても嫌な時がありました。スーツを着ている学生を見ると不思議とライバル意識が芽生え、とても憂鬱な気分になったこともありました。です

が、同じような境遇のなか頑張っている友人たちや、ずっと支えてくれた家族、そして親身になってお世話をしてくださった学生課の先生には心から感謝をしています。心が折れそうになったとき、辛くて涙を流したとき、寄り添ってくれた多くの人に支えられ、今の私がいま

この二年間は非常に短くかつ濃厚なものでした。様々な経験を経て、また多くのサポートがあつたからこそ成長させていただけのだと思います。これから私は社会人となり、多くのことを経験すると思います。時には何かを諦め、何もかもが嫌になる時期が来るかもしれません。そんな時はどうするのでしょうか。まだまだ子供で周りに依存しながら生活している私はちゃんと自立できているでしょうか。こんな風にいろんな未来の自分の姿を思い描くことは、私にいろんな道を選び歩かせてくれると信じています。

最後に、卒業を目の前にして少し後悔していることがあります。最後の学びの場であるのに、あまり勉強をしなかった

自分への後悔です。ああすればよかった、と思うことは誰にでもできます。ですが自分の甘えに打ち勝ち、後悔のないように生きるのは意外と困難なことなのです。だからこの先、失敗はあっても後悔のない道を選ぶことが私の目標です。人生にはいろんな分かれ道があるかと思っています。人生の分岐点において、振り返ってあの道を選んでよかったと、そう思える未来に賭けてみませんか。



学生からの卒業

文学科英語英文学専攻

上野 優里香

県短を卒業して、私は社会人になる。「春から社会人として頑張ります。」と言うべきなのは分かっていますが、進学する周りの友達を見て、まだ学生でいられることをうらやましく思ったりする。一方、進学を選んだ友達が「社会人いいなあ。」とほやいていたりもする。子どものころから、隣の芝は青く見えると知っているし、ないものねだりが人間の性だということも身に染みて分かっている。それでも私たちは自分でも気がつかない間に、いま持っているものとは反対のもの、あるいはいま持っていないものを求め続けている。就活のとき、面接官からは「自信がなさそう」と言われ、学校では友達から「どこからくるの、その自信。」と笑われた。1人の「私」という人間でも、見る人が

変わればこんなにも正反對な人間に見えるのだろうか。今こうして文を書いていると、読むほうがずっと楽だということに気付かされる。そして、テーブルの上のショートケーキとブラックコーヒーに、ひどく矛盾を感じてしまう。冬は夏が恋しいけれど、夏になると冬が待ち遠しい。これまでの学生生活を振り返ると、私はいつもこうだった。

幼稚園生のとき、字が書けて、筆算ができる小学生がとて大人に見えて、私は早く小学生になりたいと思った。小学生になると、勉強もせず毎日遊んでばかりだった幼稚園生に戻りたいと思った。中学生になると、早く大人になりたいと願った。いいお嫁さんになりたい、そんな思いで、家庭科の高校を選んだ。高校では毎日、魚をさばいたり浴衣を縫ったり、生け花や茶道に励んでいた。けれど、お嫁さんなんて私には夢のまた夢で、彼氏も、好きな人さえもできなかった。そして「家庭」という狭い枠から抜けて、広い「世界」を見たいと思うようになった。

だから県短では、家庭科とは全く違う英文専攻を選んだ。世界を見たいという私の思いを汲んで、両親はイギリスへ短期留学に行かせてくれた。憧れのヨーロッパ、特にシャーロックホームズやビートルズが好きな私にとって、ロンドンはその街だった。映画で何度も見た場所、ジュリアロバーツと同じ場所に立っている自分に不思議な感覚を覚えた。語学学校に通って、いろいろな国の友達ができた。英語が少しずつ分かるようになって、話せるようになった。すると今度は発展途上国が見たくなって、ベトナムへも行った。1日生きられることすらも当たり前ではない人々と出会って、自分が欲張りだということに気付いた。いつも自分が持っているものとは反対のもの、自分が持っていないものを求め、人をうらやましく思ってしまう自分が嫌になった。けれどひとつ分ったのは、「家庭」があつてこそ「世界」だということだ。一人一人の人間と、その人間が集まった小さな「家庭」が「世界」をつくっている。家庭

科と英語科という、一見かけ離れた二つを学んできた私だから気付けたことだ。

私は欲張りな自分が嫌いだったけれど、欲張りだからこそ人よりも多くのことを学べたと思うことにしている。だから社会人になっても、大人になっても、ずっと欲張りな自分でいたい。ただこれまでと違うのは、いま、自分が持っているものをもっと大切にしようと思えることだ。私が誰かをうらやましいと思ってしまうのと同じで、誰かにとっては、私がうらやましく見えるかもしれないからだ。学生を卒業するということは、学ぶのをやめるということではない。自分の学ぶ姿勢や意欲が、これまでよりも求められるだけだ。私はこれからも、自分のやりたい、行きたいという思いに素直に、活発で大胆でおもしろい大人でありたい。



◎教員人事

区分	職名	氏名	異動年月日	備考
退職	学長	種村 完司	28・3・31	
教授	揚村 固			生活科学科 生活科学専攻
教授	田中 史朗			商経学科 経済専攻
教授	中村 昇二			生活科学科 食物栄養専攻
准教授	篠田 剛			商経学科 経済専攻
就任	学長	長野 忠秀	28・4・1	
採用	教授	川島 茂		生活科学科 生活科学専攻
講師	岡田 登			商経学科 経済専攻
助教	浅海 真弓			生活科学科 生活科学専攻
昇任	准教授	穴戸 克実		生活科学科 生活科学専攻
採用	教授	亀井 勇統	28・10・1	生活科学科 食物栄養専攻
昇任	准教授	小林 朋子		文学科 英語英文学専攻

＜平成28年度卒業研究標題＞

文学科日本語日本文学専攻

氏 名

卒 業 研 究 標 題

《望月ゼミ …… 日本語学》

芦 谷 ひとみ	若者ことばについて
宇 都 裕 紀	若者ことばの略語についての考察
桑 原 郷 子	キラキラネームについて
徳 永 朱 奈	お笑いにおける「ボケ」と「ツッコミ」に関する考察
弓 指 菜 緒	現代ドラマにおける男性語と女性語

《楊ゼミ …… 日本語学、日本語教育学》

瀬 野 佑 希	「やばい」の使われ方 — テレビ番組での男女差 —
濱 崎 麻 結	相手へ好意を伝える時の男女差
福 吉 夏 美	薩摩狂句における漢字表記の違いについての研究
光 武 郁 芽	ドラマ・映画におけるツンデレ表現について — 言語的特徴と男女差 —

《木戸ゼミ …… 日本文学・古典》

今 村 絵梨奈	『大和物語』の十九段の和歌が下手だと文章中で言われている理由について
大 平 梨 奈	落窪の姫君と女親としての北の方に見る「落窪物語」における女性の幸せについての研究
千代森 恵	『とりかへばや』における宰相中将の役割
中 屋 あおい	『源氏物語』の紫の上が幼少期から描かれている理由についての研究
西牟田 千 尋	『落窪物語』における女君と北の方の鏡箱のやりとりについて
能 島 都	『竹取物語』から読み取る作者の考え
野 村 樹 里	『更級日記』から読み取れる浮舟の存在
南 実 里	『蜻蛉日記』中における作者道綱母の女性ならではの嫉妬心について
宮 崎 沙 佳	『百人秀歌』と『百人一首』において取り換えられた歌について

《竹本ゼミ …… 日本文学・近代》

岡 田 理 裳	『風立ちぬ』における死者についての考察 — 死者の聖化と無意識 —
仮 屋 絵里奈	谷崎潤一郎『痴人の愛』— 当時の女性観とナオミについての考察 —
迫 田 清 佳	太宰治『パンドラの匣』における語り形式について
堂 園 桃 子	太宰治『女生徒』における〈女生徒〉の持つ役割
友 原 幸	宮沢賢治『銀河鉄道の夜』における銀河鉄道というシンボルについて
西 真理奈	芥川龍之介「秋」— 言語化されない物語
春 田 眞 央	谷川俊太郎『日々の地図』より「木綿私記」 — 谷川俊太郎が「木綿私記」を書いた背景についての考察 —

《土肥ゼミ …… 中国文学》

疇 地 眞 子	『聶隱娘』と『紅綫』にみる女侠小説の特徴
折 口 恭 平	李商隠の詩《無題》にタイトルがないことについての考察
神 蘭 百 華	「李徴」における変身とその解釈
福 山 広 与	李賀の世界観に対する中国文学史に残る後世の詩人への影響
村 中 友 香	唐代伝奇小説における恋愛についての研究
本 咲 愛	詩人李賀の死生観を探る — 病が詩作に与えた影響 —
横 道 あすか	猿神伝説と「白猿伝」

＜平成28年度卒業研究標題＞

文学科英語英文学専攻

氏 名	卒 業 研 究 標 題
《英米文学演習》（指導教員：轟 義昭）	
上 野 優里香	ビリー・ワイルダー監督のロマンチックコメディ — 『お熱いのが好き』と『麗しのサブリナ』—
浦 本 春 香	日本とアメリカの恐怖の描き方 — 『呪怨』 『THE JUON／呪怨』 の比較—
大 窪 明 莉	ディズニーとジブリの悪役の違い
門之園 南 美	コメディ映画『ホーム・アローン』の面白さと魅力について
川 越 き り	現代の勧善懲悪の描き方 — 『オレたちバブル入組』 『オレたち花のバブル組』と『百万ドルを取り返せ!』の比較研究—
桐 原 真 央	映像作品『ゴースト』の原作とリメイク版の比較研究
西 遥 子	映画『ハリー・ポッター』とフェミニズム
《英米文学演習》（指導教員：フィリップ・アダメック）	
今 村 玲 菜	What Is the Attitude towards Religion Found in the English Pop Group XTC's Song "Dear God"?
川 村 里 穂	The Looming Shadow of Pink Slime: Should It Be Avoided?
谷 山 星玲菜	Should The United States Have an Official Language?
堀之内 里 香	Letters to Hikari: A Virtual Visit to Beverly Hills
山 口 莉 奈	What Can Japanese Learn from the Success of Finnish Schools?
濱 脇 智 史	On the American Tradition of Celebrity Roasting
《比較文化演習》（指導教員：小林 朋子）	
大 園 いくみ	日系移民の歴史と世代間の意識的抗争
大 田 真 純	「人生は物語と同じである。大切なのは長さではなく、内容である」 —リーダーが語る夢を追う生き方—
切 手 優 奈	音楽史から読み解く文化の光と影 —クラシック音楽とブラック・ミュージックの考察—
隈 本 祐 衣	「民衆の歌が聞こえるか」 —小説『レ・ミゼラブル』からみるミュージカルの魅力—
新 納 奈 歩	アボリジニの歴史と文化からたどる複合多文化国家オーストラリア
東 遼 河	国境を越えて響き合う神話 —日本神話とギリシャ神話から見る古代人の死生観—
堀 切 ゆかり	『赤毛のアン』に見る理想の少女像 —L. M. モンゴメリと村岡花子の挑戦—
森 田 利 紅	月から太陽へ戻るために —社会と家庭に支配された女性たちの足跡—
森 山 陽菜乃	『クレーヴの奥方』と『分別と多感』からみる西欧的恋愛観
横 路 友 香	笑いから見る日米比較

<平成28年度卒業研究標題>

文学科英語英文学専攻

氏名

卒業研究標題

《英語学演習》（指導教員：遠峯 伸一郎）

坂上 由莉	<i>Emma</i> と「エマ～恋するキューピッド～」におけるloveについて
瀬戸山 史華	映画「バーバーショップ」に見られるアフリカ系アメリカ人英語の特徴について
武岡 静香	生き物に関する日本のことわざと、それに対応する欧米のことわざの比較
中森 智香	漫画「スラムダンク」における擬音語・擬態語について
橋口 侑実	ポップスにおける呼びかけ語babyについて
原田 智弥	韓国語の音韻規則からみる韓国英語の特徴
松木 千佳	「ピーナッツエッセンス」のキャラクターの台詞について
森永 水姫	元素の英語名について
米澤 真凜	日本語、英語、韓国語における動詞の使い分けについて

《英語学演習》（指導教員：石井 英里子）

伊佐 柚有紀	日本英語に対する積極的な態度育成の必要性
笹山 梨紗	異文化コミュニケーションにおけるユーモア
野間 彩香	コミュニケーション・ストラテジー指導による英会話学習
福増 璃子	日本における早期英語教育導入の有用性
古川 未来	英語学習における発音の重要性について
牧元 優佳	なぜ幼児から英語教育を始めるべきなのか
三垣 里実	直接教授法による日本の中学校英語教育の検討
吉富 友紀	100万語多読による英語の学習効果
脇田 愛美莉	オーラルコミュニケーションの授業における誤用訂正 —外国人英語教師と日本人英語学習者の意識比較—

2015年度 人文学会決算報告書

彙報

収 入	
前年度繰越金	596,311
人文学会費(教員会費)	13,000
〃 (在学生会費)	77,000
預金利息	106
収入計	686,417
支 出	
印刷費(「人文学会報」)	46,224
郵送費(『人文』)	29,840
郵送費(「人文学会報」)	1,708
消耗品費	2,800
卒業記念品	63,000
支出計	143,572
次期繰越金	542,845

※教員会費は2年分です。

◎二〇一六年度人文学会行事日程

四月二十二日 総会・役員交代

(会長) アダメック

(評議員) 望月、楊、土持

(会計監査) 小林

十月三十日 『人文』第40号発行

二〇一七年

三月十七日 「会報」第78号発行



《編集後記》

『会報』は本来毎年二回発行することになっていますが、諸般の事情により秋の号を見送りました。申し訳ありません。

『人文学会報』は文学科ホームページ(<http://www.k.kentan.ac.jp/it/>)や『人文』はCiNii(http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00353755_ja.html)かKARN 鹿児島県学術共同リポジトリ(<http://karn.lib.kagoshima-u.ac.jp/>)で公開しています。卒業後もしきじきチェックしてみてください。

(望月)

